

農山村における主体形成についての予備的考察

○ 三木敦朗（岩手大学大学教育総合センター）

農山村において、地域の産業を存続させ、居住を可能とする施策は様々に提案されている。しかし、施策やシステムの生成が論じられることはあっても、「どのような人・人々がその生成を可能ならしめたのか」という人物像・人間類型を明らかにするものは少ない。また、「どのような契機によってこの人間類型が成立したのか」も明らかでないと思われる。地域おこしのためには「人づくり」が必要であると指摘される。このことを、やや広義に「(変革) 主体形成論」の範疇と考え、従来の研究を現代的に再考察することが本報告の目的である。

これまで主体形成は多くの場合、生産力の「担い手」と同一視されてきた。農林業においてはとりわけその傾向が高い。経営面積・生産量の大きさや、機械化をもって位置づけられることもある。これには一定の妥当性はあるものの、再考の余地があると思われる。

そこで例えば、山田盛太郎における主体形成を参考にしたい。山田は戦前期の産業内において、旋盤工に代表される多能的労働者に主体形成をみたのであった。分業体制の中にもありつつも生産過程が把握できることを重視したためである。また、農業においては農法（地力再生産・雑草防除体系）変革の担い手に主体形成をみる見解もある。これらを「人間と自然との物質代謝 Stoffwechsel」論とあわせて読み替えることはできないだろうか。

一方で、地域づくりにかかわる人の「集まり」をどのように考えるかも、問われなければならない。ネグリ・ハートの「マルチチュード」概念は、地域社会の画一的でも拡散的でもない多様性の把握を可能にするものである。鶴見和子の「キーパーソン」概念では、地域の中心的人物の自己教育過程が採りあげられた。しかしいずれも、上記の生産過程を通じた主体形成論との接続は不十分だと思われる。

以上のような予備的考察をふまえて、今後、農山村における農林外就労・多就業あるいは地域外就労などが地域づくりに与える影響を整理する予定である。

引用文献

アンドリュウ E バーシェイ『近代日本の社会科学』NTT出版、2007年／アントニオ
ネグリ・マイケル ハート『マルチチュード』（上・下）日本放送出版協会、2005年／鈴木敏正『主体形成の教育学』御茶の水書房、2000年／鶴見和子『内発的発展論の展開』筑摩書房、1996年／磯部俊彦ほか『変革の日本農業論』日本経済評論社、1986年／置塩信雄『現代資本主義と経済学』岩波書店、1986年／山田盛太郎『日本資本主義分析』岩波書店、1934年 など

（連絡先：三木敦朗 mikia26@iwate-u.ac.jp）